

契沖にみる歌ことばの拡大

——「室生の寺」「室生の山」——

浅
見
緑

目次

はじめに	30
一 和歌にみる室生	32
1 『万葉集』の室生	32
2 真観の歌と「室生のけもも」	33
3 道我の歌	35
4 道我の歌にみる趣向	36
二 契沖の和歌と室生	38
三 契沖の歌枕研究	41
1 『万葉代匠記』『類字名所補翼抄』	41
2 『勝地吐懐編』	44
おわりに	45

はじめに

本稿では、江戸時代前期の古典学者・契沖（一六四〇～一七〇一）が詠んだ室生寺の和歌をおもな素材として、近世における歌ことば拡大の一こまを考察する。

契沖が詠んだ室生寺の和歌とは、次の三首である。すなわち、第一首と第二首とは、契沖の和歌の集大成である『漫吟集類題』卷十三 羈旅歌 に収められた

むろふといふ山寺にまうて、こもりゐける時

旅にして今日も暮ぬと聞もうしむろふの寺の入相のかね（四〇三三）

たれかまた後もこもりて獨みん室生の山の有明の月（四〇三四）

であり、また第三首は同じく『漫吟集類題』卷二十 雑歌四 の

むろふといふ山寺にまうてける時、山賤ともの、けかしきむしろになみゐて、あはをのみくふを見て

山里にかくてし過す年月をけにもるいひのあはれとそおもふ（五八〇三）

である。

室生寺は、契沖にとって格別の思いがある場所であった。十一歳で出家した契沖は、高野山で修業を積んだのち、大坂生玉の曼陀羅院という寺の住職となったが、寛文六年（一六六六）四月、二十七歳のときに寺を去り、おもに大和の地において放浪と修業の日々を送った。安藤為章の『行実』は、そのときの様子を

一笠一鉢随意周遊、詣和州長谷寺、絶食念誦一七日、登室生山、練行三七日。

一笠一鉢にて随意に周遊し、和州長谷寺に詣りて絶食念誦すること七日、室生山に登りて練行すること二

十一日。

と記し、契沖が長谷寺と室生寺とで厳しい修業の日々を過ごしたことを伝えている。また僧・義剛の『録契沖遺事』には、

室生山南有一巖窟。師愛其幽絶、以為堪捨形骸、乃以首触石、腦血塗地。無由命終、不得已而去。

室生山の南に一巖窟有り。師（＝契沖）その幽絶なるを愛し、形骸を捨つるに堪うと以為ふ。乃ち首を以て石に触て、腦血地に塗る。命終るに由無く、已むを得ずして去る。

とあって、契沖が室生山の南にあった巖窟の幽絶なるさまを愛し、一度はこの地で生命を絶とうとさえ思った、と述べている。

その後、契沖は和泉国での寄寓生活を経て大坂に戻り、日本古典の研究に本格的に取り組んだ。その業績には、主著『万葉代匠記』をはじめ『古今余材抄』『勢語臆断』『厚顔抄』（記紀歌謡の注解）『百人一首改観抄』『源注拾遺』『新勅撰集評注』など古典の注釈、『勝地吐懷篇』『類字名所補翼抄』など歌枕（名所）の研究、『和字正濫鈔』『和字正濫通妨抄』など歴史的仮名遣いの研究、があり、質量ともに群を抜いている。その研究の特徴が、中世の口伝による伝授に対し、文献に基づく実証的方法を確立した点にあることは、言うまでもないであろう。

室生寺での日々は、決して長期間ではなかったが、契沖の生涯において、古典の研究に本格的に進む直前にあたっている。この、いったんは「形骸を捨て」ようとさえ思った室生の地を詠んだ契沖の和歌に、私たちはどのような意義を見出すことができるであろうか。

一 和歌にみる室生

契沖の三首について検討する前に、従来室生の地および室生寺がどのように詠まれてきたのかを見てみよう。室生寺は奈良時代末に創建された古刹であり、仏教美術・建築の宝庫として知られている^③。しかし、この室生の地は、意外にも古典文学の世界には全くといってよいほど登場しないのである。ここでは、分野を和歌に限って記述を進めていくことにする。

1 『万葉集』の室生

『万葉集』に室生の地を詠んだ歌はわずかに一首しかない。それは、卷十一のよみ人知らず、

日本之 室原乃毛桃 本繁 言大王物乎 不成不止 (二八三四)

右一首、寄果喩思。

大和の 室生の毛桃 本繁く 言ひてしものを 成らずは止まじ

右の一首、果に寄せて思ひを喩へたるなり。

口語訳

大和の 室生の毛桃の 本が茂っているようにしげしげと 言ったからには 実らずじまいということは
なからう

という恋の成就を願う歌である^④。

ところで、ここでは原文「室原」を「むろふ」と訓読し、これを室生の地のこととしているが、これには異説もある。たとえば、嘉元元年（一一三〇三）ごろの成立とされる『歌枕名寄』は、この歌の「日本室原」を「未勘国（所在未詳）」の項に分類しているし（後述）、他に、『和名抄』の城下郡室原郷（現在の磯城郡田原本町唐古）とする説、葛上郡室（現在の御所市室）とする説、などがある。このように異説が並存しているのは、いずれの説にも決定的な根拠が欠けているからである。たとえば、澤瀉久孝『萬葉集注釋』では、最初に「室生は宇陀郡室生村、室生寺のあるところ」と言いながら、次いで土屋文明『萬葉集私注』と吉田東伍『大日本地名辞書』が城下郡室原郷説であることを紹介して「或いはそこかとも思はれる」と述べ、断定を避けている。

2 真観の歌と「室生のけも」

続く王朝文学においても、室生の地はほとんど登場しない。そして、その後、『万葉集』のこの歌を踏まえた作品は、唯一の例外を除いて伝わらず、室生が歌枕として定着することもなかったのである。

その唯一の例外は、藤原家良編『新撰和歌六帖』（『新撰六帖』、『新撰六帖題和歌』ともいう）の中にある。『新撰和歌六帖』は、鎌倉時代、寛元元年（一二四三）から二年にかけて、家良・為家・知家・信実・光俊の五人の歌人が『古今和歌六帖』の歌題について、各人一首、合計五二七首ずつ詠じ、これを歌題ごとに部類配列して六帖にまとめあげたものである。その第六帖、桃を題とする五首の一つに、右大弁光俊の

あかねさす色こそまがへ日の本のむろふのけも花ざかりかも（二四一五）

という歌がある。作者の右大弁光俊とは葉室光俊、すなわち真観（二二〇三〜二二七〇）のことである。彼は、

定家に和歌を学びながら、のち為家ら御子左派に対抗して反御子左派を結集して活動、新奇さをねらった歌風で『万葉集』を尊重したことで知られる。この真観が、まさに『万葉集』の前掲歌を本歌とした作品を残しているのである。

この『新撰和歌六帖』および真観に対しては、源承（一二二四）没年未詳。俗名は藤原為定。為家の二男）が歌学書『和歌口伝（愚管抄）』において厳しく非難している。たとえば「序」で、

新六帖（今號寛元六帖）⁷歌作者五人にてよみ侍りしを、たがひに點をゆるされしかばひとしき思ひいできにけるにや、此六帖の歌をば、常盤井入道殿（藤原実氏）此道あらずなりなんずといさめ仰せられき。

と述べているが、文中の実氏の言葉は「（和歌の）正道がなくなってしまうだろう」という意味である。

源承の『和歌口伝』で注目されるのは、「八 万葉集歌とる事」の項で、『万葉集』の歌を本歌としたり、その名所（歌枕）を取ったりすることを、御子左家の教えに背くものとして非難していることである。その口調は真観に対して特に辛辣で、真観の作四首と本歌となった『万葉集』の歌とをあげた後、

本歌をとる姿もあらはにそれときこゆ。ことごとくしく耳にたつを秀逸と思へり。當家不レ許レ之。

と言っている。源承は、御子左家嫡流の二条家流の一員としての自負をもって真観らを非難しているのであって、二条家を本流とする立場からすれば、真観の歌、ことに『万葉集』の歌を本歌とする作品は異端であるということになる。ここでは「室生のけもも」の歌そのものとはとりあげられてはいないが、当然非難の対象となるものであったと考えられる。

3 道我の歌

もう一人例外的に室生の地を歌に詠んだのは、僧・道我（一二八四～一三四三）である。道我は、僧侶として権僧正、東寺二の長者の高位にあったが、二条派の歌人としても、二条為世の撰である『続千載和歌集』以下の勅撰和歌集に十首入集するなど活躍した人物である。また、当時、為世門の「和歌四天王」の一人と数えられた兼好法師と交遊があったようで、『徒然草』百六十段に登場する「清閑寺僧正」とは、この道我のこととされる。

室生の地が登場する道我の作品は二首ある。その第一は、『続千載和歌集』巻八羈旅に採られた、

長谷寺より室生へまうで侍りけるに、山路に日暮れて、鐘の声きこえ侍りければ 法印道我

いまぞきく夕こえくれて初瀬山ひばらのおくの入相のかね（八一三）

である。「夕こえくれて」は（山を）夕方に越えていくうちに日が暮れること、また「ひばら（檜原）」は三輪山・初瀬山^⑧一帯を指す。夕暮れの室生路にあって、静寂の中に鐘の音が聞こえてくる情景を歌った歌である。室生の話は詞書に見えるだけで、歌中に現われる地名は初瀬山であって室生ではないし、その舞台も室生寺そのものではなく、長谷寺から室生寺に至る山道なのであるが、それでも勅撰和歌集にあっては、室生の地が登場する希有の例である。

道我にはもう一首、家集『権僧正道我集』雑に

大和国室生寺に詣て、暁下向し侍しに、谷々に雲むして、あけほの、月かすかに山葉にのこり侍しかば

影うすき月はおのへに入やらて 谷の戸とつるあけほの、雲（一〇三）

という歌がある。「おのへ」は、歴史的仮名遣いでは「をのへ」で、尾（尾根、峰）の上の意。こちらは室生寺からの帰路に、谷間の空に展開していた月と雲との情景を詠んだもので、月が山の尾根に入らないうちに、あけぼのの雲が谷の戸を閉じてしまった、という大意である。

以上、道我の室生寺に関わる二首の歌を見てきたが、すでに明らかなように、一首目は長谷寺から室生寺に向かう途上で、二首目は室生寺からの帰路に、詠んだ歌であった。すなわち道我は、室生寺に参詣し、その往復の道中では歌を詠んでいながら、室生寺そのものを詠んだ歌を残さなかったのである。

4 道我の歌にみる趣向

ここで、道我の一首目の歌をもう一度検討してみよう。

『続千載和歌集』卷八 羈旅

長谷寺より室生へまうで侍りけるに、山路に日暮れて、鐘の声きこえ侍りければ 法印道我

いまぞきく夕こえくれて初瀬山ひばらのおくの入相のかね（八一三）

この歌は初瀬山・檜原に入相の鐘を配しているが、これは王朝和歌によく見られる組合わせなのである。たとえば『詞花和歌集』卷三秋に

霧をよめる

源兼昌

夕霧にこずゑもみえずはつせ山いりあひの鐘のをとばかりして（一一二）

とあり、また『千載和歌集』卷十七 雑中に

大宰大貳重家入道みまかりて後、山寺ノ懐旧といへる心をよめる

藤原有家朝臣

初瀬山いりあひの鐘を聞くたびにむかしのとをくなくなるぞかなしき（一一五四）

とあって、いずれも初瀬山と入相の鐘を詠んでいる。後者の詞書にある重家人道とは、作者有家の父である。また初瀬山・檜原と「夕越え暮れて」という表現を合わせたものとして、

『新古今和歌集』卷十 羈旅

長月の比、初瀬に詣でける道にてよみ侍ける

禅性法師

初瀬山ゆふこえくれて宿とへば三輪の檜原に秋かぜぞ吹（九六六）

という歌もある。歌人・道我は、これらの歌をよく知っていたはずである。

道我の歌は、「夕越え暮れて」「初瀬山」「檜原」「入相の鐘」という、王朝和歌によく使われる語を組み合わせて成立しているの、一見ごく平凡な歌に思えるが、実は一つの工夫が施されている。それは「檜原の奥」という表現である。

詞書によれば、作者・道我は、長谷寺から室生寺へ向かう途次、山路にあって日が暮れるころ、鐘の音が聞こえてきたので、この歌を詠んだという。そうすると、そのとき聞こえてきたのは室生寺の鐘であり、「檜原の奥」とは、具体的には「室生」を示していることになろう。しかし、道我は歌中に「室生」の語を用いてはいないのである。

王朝和歌の世界では、「室生」という歌枕は存在せず、何のイメージももたない。また、一の2でとりあげた源承の『和歌口伝』が述べるように、二条家流では『万葉集』の名所を歌に詠むことは、異端であるとされていたのである。まして『万葉集』の「室生のけもも」は恋の成就を象徴する存在である。道我は、自身の足で詣でた室生の地を和歌に詠むにあたって、「室生」の語を避け、王朝和歌の歌枕である「初瀬山」や「檜原」

を使って表現せざるをえなかったのではないか。この歌は、詞書が無ければ、一見初瀬の檜原を詠んでいるようにみえるが、実は室生寺の鐘を遠くに聞いているさまを詠んだのではないかと考えられる。室生という語を使わず、歌枕として頻用される語を組み合わせ、間接的な表現で室生を詠む。そこに道我の趣向があったのである。

二 契沖の和歌と室生

それでは、前章を踏まえて、もう一度契沖が室生を詠んだ歌を見てみよう。

『漫吟集類題』卷十三 羈旅歌

むろふといふ山寺にまうて、こもりゐける時

旅にして今日も暮ぬと聞もうしむろふの寺の入相のかね（四〇三三）

たれかまた後もこもりて独みん室生の山の有明の月（四〇三四）

同 卷二十 雑歌四

むろふといふ山寺にまうてける時、山賤ともの、けかしきむしろになみみて、あはをのみくふを見て

山里にかくてし過す年月をけにもるいひのあはれとそおもふ（五八〇三）

まず一首目であるが、この歌は『拾遺和歌集』卷二十哀傷の

題知らず

よみ人知らず

山寺の入相の鐘の声ごとに今日も暮れぬと聞くぞ悲しき（一三三一九）

という、山寺の入相の鐘を歌った作品を踏まえて成ったものであろう。この歌は、『和漢朗詠集』の「山寺」

の項にも見えるなど、著名な作品であった。

しかし、契沖がここで入相の鐘に配して詠み込んだ山寺は、王朝和歌の定型とも言える長谷寺ではなく、王朝文学にほとんど登場しない室生寺であった。室生という語は従来和歌の歌に用例が無いので、たとえば和歌本文中ではこの語を避けて山寺とし、詞書にのみ掲げる、というような手段をとることも可能であったが、契沖はあえて「室生の寺」という語を詠み込んだのである。そこに、「室生」を歌に詠みたいという契沖の積極的な意志がうかがえるのである。

二首目は、有明の月という歌語を用いている。この語は、男女の後朝の別れのつらさをあらわした場合が多いが、それとは別に、間もなく山の端に入るところから、遁世、出家者の象徴として詠まれることがあった。その一例として、

『新古今和歌集』卷十六雑上

世をそむきなんと思ひ立ちけるころ、月を見てよめる 寂超法師

ありあけの月よりほかはたれをかは山路の友と契をくべき（一五四三）

をあげることができ。詞書の「世をそむきなんと思ひ立ちけるころ」とは「出家しようと思ひ始めたころ」の意である。また、『新古今和歌集』の同じ巻には

摂政太政大臣大将に侍し時、月歌五十首よませ侍けるに 前大僧正慈円

在あけの月のゆくゑをながめてぞ野寺の鐘は聞くべかりける（一五二二）

という歌もある。ともあれ、契沖の二首目の歌も、一首目と同様、王朝和歌の調べをもちながら、室生の地を詠んでいる点が注目されるのである。

三首目は、詞書にあるように、「山賤ども」が穢しき（汚れた）むしろに並んで座り、粟を飲み込むように

食べていた様子を見て詠んだ歌である。「けにもるいひのあはれとおもふ」とは、「筥（食器）に盛る飯の粟」の粟に「あはれ」を掛けたものである。

この歌で注意すべきは「けにもるいひ」という語である。この語は、『万葉集』巻一「有間皇子自ら傷みて松が枝を結ぶ歌二首」の内の一首で、

家有者 筥尔盛飯乎 草枕 旅尔之有者 椎之葉尔盛（一四二）

家いにあれば 筥けりに盛る飯を 草枕くさまくし 旅りにしあれば 椎しの葉はに盛る

口語訳

家に居れば 器に盛る飯を（草枕） 旅にあるので 椎の葉に盛るのか

という有名な歌⑩に見えるもので、契沖も当然これを踏まえているに相違ないのだが、実はこの「けにもるいひ」という語は、歌語としては特異なものなのである。

藤原俊成は、その歌論書『古来風体抄』上において、有間皇子のこの歌を評して、

「飯」などいふことは、この頃の人も、うちうちには知りたれど、歌などには詠むべくもあらねど、昔の人は心の憂晴なくて、かく詠みけるなるべし。この歌、歌様はいみじくをかしき歌なり。

口語訳

「飯」などということは、この頃の人も、内々には知っていても、歌などには詠みそうにもないけれど、昔の人は、平常のときと晴れがましいときの区別の意識がなくて、この歌のように詠んだのであろう。この歌は、歌様の非常に趣のある歌である。

と述べている。すなわち、俊成の時代には、飯というのは日常語であって、和歌の中に用いるべきではない、という意識が人々の間にあったのである。俊成のこの言葉を裏付けるように、『万葉集』にこの著名な用例が

あるにもかかわらず、勅撰集の中には「けにもるいひ」という表現は見られないのである。これも、王朝和歌の世界では、歌に詠むことを忌避することばという点で、室生と共通している。

契沖はこれら三首の和歌において、王朝和歌の伝統的な表現に沿いながらも、王朝和歌では詠まれることになかった室生の地を、自らの修養の場としての実感をこめて詠み込んだり、『万葉集』以後用いられていなかった「けにもるいひ」という表現を再生したりしているのであって、私たちはそこに、歌ことばを拡大しようとする契沖の意志を見ることができるのである。

三 契沖の歌枕研究

前章では、歌人としての契沖が、従来は和歌に詠まれることのなかった室生の地を、自己の作品に詠み込んだことを見てきた。そこで次に、古典学者としての契沖が、その名所（歌枕）研究において「室生」をどのようにとらえていたか、ということが問題となる。本章では、第一章でとりあげた二つの和歌を、契沖がどのように扱っているのか、調べていくことにする。

1 『万葉代匠記』『類字名所補翼抄』

一の1で見たとおり、『万葉集』巻十一「室生（原文は室原）のけもも」の歌の「室原」については、いくつかの異なる比定がなされており、『万葉集』そのいづれもが決定的な根拠を欠いているのである。たとえば、十四世紀初めの成立とされる澄月編『歌枕名寄』は、中世の名所歌集の中で、最も組織的で重要なものであるが、その

「未勘国 下」の項に

日本室原

万十一

日本之 室原乃毛桃 本繁 言大王物乎 不成不止（九七四〇）

新六

光俊

あかねさす色こそまがへ日の本のむろふのけも花ざかりかも（九七四一）

とあって、「日本之室原」は所在未詳であるとしている。それでは、契沖の『万葉代匠記』は、「日本之室原」について、どのように述べているだろうか。

現在の『契沖全集』には、初稿本と精撰本、二種類の『万葉代匠記』が収められている。その初稿本には、次のように言う。

やまとのむろふのけも、日本之とかけを、ひのもとのと和點をしたれと、たよもしに、やまとのと讀へし。和州（以下三手本）「の別名」（以上三手本）なり。室原は和名集云。大和國城下郡室原。これ室生山といふ靈地なり。村も有なり。ならずはやましは、桃の實によせて、逢を戀のなるといへり。

まず「日本」を「ひのもと」ではなく「やまと」と読むべきであるとし、これを大和の国（すなわち奈良県）と限定している。次いで『和名集（和名抄）』を引いて「室原」を室生に比定しているのであるが、これは契沖の勘違いである。『和名抄』にある城下郡室原とは、現在の田原本町の地であって、室生山ではない。したがって、『和名抄』を根拠として「これ室生山といふ靈地なり」という結論が出るはずがないのである。

精撰本では、初稿本の誤りを訂正して、次のように述べている。

日本之室原乃毛桃

發句ハヤマトノト讀ヘシ。室原ハ和名集流布本ニ城下郡ニ載テ、注ニ他本也トアルハ他本ノ誤ナリ。延喜式云。宇陀郡室生龍穴神社。檀生トモカケリ。哥ノ喩フル意ハ第七第十二既ニ見エタリ。

「日本」を「ヤマト」と読むことは同じだが、『和名抄』による城下郡説を示した上でこれを斥け、『延喜式』を引用して、宇陀郡室生の地に比定しているのである。

以上の検討により、次のような推定が可能である。契沖の頭には、最初から（おそらく『和名抄』を見る以前から）「室原」は宇陀郡の室生の地、「室生山といふ靈地」に違いない、という考えがあった。そのため、『和名抄』の城下郡室原がそれとは異なることに気がつかないまま、初稿本を書いた。後にその誤りに気づいたが、あくまで宇陀郡の室生に比定するため、『延喜式』を引用して精撰本の記述を整えたのである。この推定が正しければ、この比定には、『万葉集』の中に室生という地名を見たい、という契沖の思いが作用していたことになる。この比定により、「室生」は確実に万葉集にみえる地名となったのである。

なお、契沖の名所研究の一つである『類字名所補翼抄』四では、室生を項目として立て、『万葉集』のこの歌を示している。宇智郡とあるが正しくは宇陀郡である。

室生檀生とも

大和宇智郡

万十一

日本のむろふのけも、本しけみ我君物をならすはやまし

このほか、歌枕のリストである『勝地通考目録』の大和の項に

室生（宇陀 或檀生）

を挙げ、また『大和國地名類字』に

一 室生山（延喜式） 檀生山（三代實録） 宇陀郡（宇陀の町より四里許良）

一 室生龍穴神社（宇陀）

を示している。

2 『勝地吐懐編』

一の3、一の4でとりあげた道我の「今ぞきく」の歌を、契沖はその名所研究において、どのように扱っているであろうか。

この問題を考察するためには、元和三年（一六一七）、連歌師・里村昌琢が編纂した『類字名所和歌集』を、まず調べてみなければならない。この書は、「南北朝期に成立した『勅撰名所和歌要抄』と宗碩編の『勅撰名所和歌抄出』とを典拠に編纂されたもので、『古今集』から『新統古今集』までの勅撰二十一代集中より、名所和歌を選出し類聚したもの」（村田秋男氏解題）であって、契沖以前の代表的な名所研究の書物である。そして、契沖の名所研究も、この『類字名所和歌集』を訂補する作業から始まったのであった。

道我の「今ぞきく」の歌は、『類字名所和歌集』巻一、泊瀬の項に見える。この項には、貫之の「人はいさ心もしらす古郷は花そむかしのかに匂ひける（原文のまま）」を筆頭に八十八首もの歌が列挙されていて、泊瀬が王朝和歌の歌枕として愛好されたことを知るのであるが、その第四十七番目に道我の歌が掲げられている。

続千載旅 今そきく夕超暮て初せ山ひはらかおくの人あひのかね 法印道我

つまり、ここでは道我の歌は、数多い泊瀬の歌の一つとして扱われているのである。ちなみに、この『類字名所和歌集』には室生の項が無く、室生を歌枕として認めていないことがわかる。

契沖が、『類字名所和歌集』の記載の誤りを正し、例を補った著作が『勝地吐懐編』である。その『勝地吐

懐編』（三巻本）中巻には、次のようにある。

室生權生とも

大和宇陀郡

長谷寺より室生へまうて侍けるに、山路に日くれて、鐘の聲聞え侍りければ

法印道我

續千載 旅

今そきく夕こえくれてはつせ山ひはらの奥の入相のかね

契沖は、室生を歌に詠まれる名所、歌枕の一つとして認め、道我の歌を室生の歌としたのである。私たちはここに、「室生」を、『万葉集』の「室生のけもも」とは異なった歌ことばとして認定しようという契沖の意志を見ることが出来る。そして、この意志が、歌人として自作に室生の語を詠みこんだ姿勢と相通することは、もはや言うまでもないであろう。

おわりに

最後に、室生を詠んだ三人の歌人について簡単にまとめて結びとしたい。

まず真観は、『万葉集』を引いて「室生のけもも」を詠んでいるが、これは、桃の題詠として詠んだものであり、真観自身が、室生の実景を目の当たりにして詠んだものではないだろう。

次に道我は、実際に室生寺に詣で、その道中における実感をもとに詠んでいるが、王朝和歌に用例の無い室生という語を使わず、伝統的なことばを重ね合わせて詠んだのであった。

契沖は、室生で過した実感を詠むに際して、「室生の寺」「室生の山」という語を使用した。また古典学者として『万葉集』の室原を室生に比定し、『万葉集』に室生が存在することを主張する一方、道我の「いまぞき

く」の歌を室生を詠んだ歌として認め、室生を、人里離れた霊地、仏道修業の場、というイメージの歌ことばとしたのである。

室生寺は、古刹であるだけに、王朝の昔から詠まれていたように思われるが、実はそうではない。歌ことばが拡大していく一つの小さな、しかし確実な歩みを契沖の室生に見ることができる。

注

- (1) 久松藩一『契沖』人物叢書一一〇 吉川弘文館 一九六三年 四二―四四頁
 『契沖年譜』『契沖全集』第十六巻 岩波書店 一九七六年
 両者の『行実』『録契沖遺事』の本文には異同がある。ここでは『全集』所収のものにより、訓読は筆者において行なった。
- (2) 室生寺については多くの研究があるが、その歴史については遠日出典氏の著書によくまとめられている。
 遠日出典『室生寺史の研究』巖南堂書店 一九七九年
 遠日出典『室生寺 ―山峡に秘められた歴史―』新人物往来社 一九九五年
- (3) 拙稿「室生寺の魅力」では、文学に現れる室生寺について、『万葉集』から近世の名所記にいたる概観を示した。『読売新聞』（大阪版）一九九九年八月三日附夕刊 文化欄
- (4) 原文・読み下し本文・口語訳は、小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳『萬葉集③』（新編日本古典文学全集 小学館 一九九五年）による。
- (5) 澤瀉久孝『萬葉集注釋 卷第十一』中央公論社 一九六二年
- (6) 佐佐木信綱編『日本歌学大系』第四巻 風間書房 一九五六年
 福田秀一『中世和歌史の研究』角川書店 一九七二年
- 井上宗雄・望月俊江『源承和歌口伝』注解（一）『立教大学日本文学』一九八五年十二月
- (7) 引用文中のへは割り注を示す。以下も同じ。

- (8) 井上宗雄『中世歌壇史の研究 南北朝期』明治書院 一九六五年 改訂新版一九九〇年
- (9) 「清閑寺僧正」は、道我ではなく、道源ではないかという説もある。安良岡康作『徒然草全注釈』角川書店 一九六八年
- (10) 一般に「初瀬」は、「泊瀬」「長谷」とも詠まれている。本稿では、引用の本文の表記にそれぞれしたがう。
- (11) 「のみくふ」はあまりみない語であるが、『日葡辞書』に「食べものを噛まないで呑み下す」とある。土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』岩波書店 一九八〇年 四七一頁左。
- (12) 原文・読み下し本文・口語訳は、小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳『萬葉集①』（新編日本古典文学全集 小学館 一九九四年）による。
- (13) 本文・口語訳は、橋本不美男・有吉保・藤平春男校注・訳『歌論集』（日本古典文学全集第50巻 小学館 一九七五年）による。
- (14) 村田秋男編『類字名所和歌集 本文編』笠間書院 一九八一年
- 本稿中に引用した『漫吟集類題』『万葉代匠記』『類字名所補翼抄』『勝地吐懐編』『勝地通考目録』『大和國地名類字』は『契沖全集』（岩波書店）、『新撰和歌六帖』『続千載和歌集』『歌枕名寄』は『新編国歌大観』（角川書店）、『権僧正道我集』は『私家集大成』（明治書院）、『拾遺和歌集』『詞花和歌集』『千載和歌集』『新古今和歌集』は『新日本古典文学大系』（岩波書店）の本文に拠った。漢字の字体については、通行の字体に改めたところがある。

